

『エソポのハブラス』の〈ニ〉と〈へ〉について — 『天草版平家物語』との比較 —

来 田 隆

—

エソポのハブラス（以下「エソポ」と略称する）は天草版平家物語（以下「ヘイケ」と略称する）と金句集と合わせて一冊に合綴されている。これらのキリシタン口語資料三部作のそれぞれの編纂意図について土井忠生先生は「平家物語で主に日常会話における一般の話言葉に重点が置かれたと観れば、伊曾保物語では説教等に利用するに足りる内容と調和したところの効果的な表現が考慮されてゐると言へよう。金句集に至っては、その最も洗練された形態が提示されたものである。」と説かれて⁽¹⁾いる。そして、エソポの用語について、「不安的なことばづかひで、所により、また人によって必ずしも一様ではなかったもの」の例の一つとして〈ニ〉と〈へ〉の使い方を取り上げられ、「天草版伊曾保物語全体としては、場所や対手を示すのに、『へ』よりも『に』が多く使はれてゐる」こと、万治版文語本伊曾保物語と対比して両書で必ずしも一致しないことを指摘され、そしてこの違いは両者の共通祖本たる文語本からの影響とも九州方言の反映とも考えられるが、「その点の判断は極めて困難」と⁽²⁾されている。「近古の国語」ではこれを「筑紫方言」の影響とされたのであるが、それに対して前田勇氏は文語の影響を考慮すべきだと⁽³⁾されている。

ヘイケとエソポとの編纂意図について、前者は「日本語／日本文化に関する初級学習書」、後者は「宣教師としての活動にそなえた上級学習書」として編纂されたものとみるべきだとする新しい見解が小松英雄氏によって⁽⁴⁾提示されている。オ段長音の開合の表記がエソポに比してヘイケに多いこと、また、ローマ字綴に於いてエソポでは原則として名詞と名詞とが一続きに綴られているのに対してヘイケではスペースが置かれていることについて、これらの相違は両書の編纂意図の違いの反映と見るべきであり、ヘイケとエソポとがこの順序で合綴されていることも、そうい

う意図に沿ったものだ」とされる。オ段長音の開合の表記について言えば、当時の「京都における基底的な口頭言語では開合の区別が失われていたために、初級学習書にその実態の一端が示されているのに対して、上級学習書には規範的な語形が優先されている。宣教師が説教に使用する日本語は上品でなければならなかったからである」とされる。そうした「計算された使い分け」の他の例として、ヘイケの序文では「読誦の人に対して書す」とあるのがエソポの序文では「読誦の人へに対して書す」となっていること、タイトルページの国名が前者ではニホン（NIFON）とあるのが、後者ではニッポン（NIPPON）となっていることを挙げておられる。序文の〈ニ〉と〈ヘ〉の違いは、「基底言語では助詞ニが多用されており、京都の上品なことばづかいには助詞エが多用されていたから」であるとされるわけである。また、「母」の語形について、ヘイケでは最初に出てくる1例だけがfafaであとはfauaとあるのに対して、エソポではfauaばかりであることもその例として追加しておられる。⁽⁵⁾

ヘイケとエソポの関係を初級者用学習書と上級者用学習書とするこの見方に対しては福島邦道氏の批判があるところである。⁽⁶⁾〈ニ〉と〈ヘ〉についても、序文に於ける違いだけをもって全体に及ぼしていいかと問題点も指摘されている。けれども、ヘイケに比べてエソポに〈ニ〉が多用されていることは事実であって、この違いがなにに由来するかについては問題として残っている。

ヘイケもエソポもその用語にはそれぞれの原拠本からの影響の問題を考えなければならない。ヘイケについては古典平家との対比が必要であろうが、〈ニ〉と〈ヘ〉の異同について、原拠とした古典平家の特定の問題もあり、逐一比較することは困難を極める。エソポの原拠本は文語本伊曾保物語との共通祖本（文語本）が想定されているが、それからの影響を云々することは一層容易ではない。そこで本稿では、ヘイケとエソポの〈ニ〉と〈ヘ〉の使用率の違いの要因について、原拠本の問題はさておき、それぞれの用法を比較して、そこから見えてくるところを明らかにしようとするものである。

ヘイケとエソポの〈ニ〉と〈ヘ〉について、機能の面からは差異が認められないことについては安達隆一氏がすでに指摘されている。⁽⁷⁾すなわち、〈ニ〉〈ヘ〉の承ける語として「方・傍・許・トコロ」を、係りゆく動詞として「赴く・のぼる・あがる」に着目して比較すると、〈ニ〉は

「静止性、空間（地点）性」、〈へ〉は「運動性・方向性」という機能的差異がエソポに認められ、それはヘイケにも通ずるということである。〈二〉と〈へ〉とに機能上の差が無いとすれば、エソポに〈二〉が多用されていることには別の要因が考えられなければならないことになる。

用例の採取にあたっては、ヘイケは近藤政美他編『天草版平家物語語彙用例総索引』（勉誠出版）、エソポは大塚光信・来田隆編『エソポのハプラス 本文と総索引』（清文堂出版）を用いた。

二

まずヘイケとエソポの〈二〉〈へ〉について、用例数を比較する。⁽⁸⁾〈二〉と〈へ〉の比較を問題とするので、対象となるのは名詞を承けるものである。そして、〈二〉と〈へ〉とで用法が重なる《動作・作用の行われる空間的場を示す》もの及び《動作・作用の対象とする事物を示す》もの（A類）と、〈二〉にのみ見られる用法である《行為・作用としての結果、到達すべきところ・状態》《並列・累加》《同じ動詞を累加する動作の強調》《原因・理由》《目的》《対象の状況・状態》《手段・方法》《受身・使役の表現での動作の主体》《比較・対比の基準となる事物》《尺度とする数量や単位》を示すもの（B類）とに分け、A類はさらに1類「移動性動詞に係るもの」と2類「非移動性動詞に係るもの」とに分けた。そして、B類を3類として、両書に於ける〈二〉〈へ〉の用例数をまとめると表Ⅰのようになる。

〔表Ⅰ〕

	ヘイケ				エソポ			
	二	へ	計	二の割合	二	へ	計	二の割合
1	322	512	834	38.6	108	39	147	73.5
2	1389	221	1610	86.2	358	33	391	91.6
3	1423	—	1423	—	322	—	332	—
計	3134	733	3867	81.0	788	72	860	91.6

動詞のなかには一つの動詞が非移動性動作と移動性動作との両方の意味を持つものがあるが、この表では一つの動詞は一つの分類項目に入れることとし、用例の量や説明の便宜によっていずれかに類別している。例えば「向かう」は1類に、「ござる」は2類に収めている。また、「動作・作用の行われる時間的場」は〈ヘ〉にその用例が無いので3類に入れている。

この表から知られることは、〈ニ〉と〈ヘ〉の使用率が両書で大きく異なるのは1類「移動性動作動詞」に於いてであるということである。ヘイケでは〈ニ〉の占める割合が39%であるのに対して、エソポは74%に達する。それに対して、2類「非移動性動詞」の場合はヘイケが86%、エソポが92%であって、エソポの方にやや〈ニ〉の使用率が高いというものの、両書に大きな差異は無いと言える。

以下には、両書に共通する動詞を取りあげて、その具体例を比較して、〈ニ〉と〈ヘ〉の使用率の差の意味するところを考察する。

三

ヘイケとエソポとで〈ニ〉と〈ヘ〉の使用率に大きな差が見られるのは1類である。表Ⅱは移動性動作を表す動詞でヘイケとエソポに共通する動詞について、〈ニ〉と〈ヘ〉のそれぞれの用例数をまとめたものである。

〔表Ⅱ〕

	《ヘイケ》 《エソポ》				《ヘイケ》 《エソポ》			
	ニ	ヘ	ニ	ヘ	ニ	ヘ	ニ	ヘ
上がる	9・3		3・1		飛び入る	1・1	2・0	
出づる(1)	12・18		15・1		のぼる	9・32	8・1	
入る	36・38		7・4		走り帰る	0・1	1・0	
落つる	5・9		3・0		馳せ集まる	1・1	1・0	
赴く	6・11		2・2		参る	11・62	1・1	
下りる	1・0		1・0		向かう	18・22	13・0	
帰る	4・20		11・0		持って参る	1・1	1・0	
くだる	8・29		1・0		行く	5・14	13・11	

来る	4・0	4・3	寄る	6・2	1・0
近づく	0・1	3・0	渡る	1・15	1・3
着く	28・6	1・0			

(注)(1)「出づる」は「づる」を含む。

これらの動詞のうち、ヘイケとエソポの〈ニ〉と〈ヘ〉の使用率の違いが何故生じているのかの一面をよく示すのは「向かう」の場合である。「向かう」は、ヘイケでは〈ニ〉18例・〈ヘ〉22例、エソポでは〈ニ〉のみ13例であって、用例数からはエソポが〈ニ〉を多用している。しかし、子細に両書の用例を比較すると、以下のような用例上の偏りが見られるのである。

「向かう」は、i 非移動性動作を表す《相手に向く、対面する》ものと ii 移動性動作を表す《その方に向かって進んで行く》とがある。(用例の掲出にあたっては、○はヘイケ、◎はエソポの例であることを示す。)

i ○常は兼光に向かうて物語りつかまつった。(172-1)

○上洛する者が大衆に向かつて合戦をするならば、(175-2)

○帝王に向かひまらして弓を引くか？(221-21)

◎シャントに向うて言ふは、(20・15)

◎海に向うて叱って言ふは、(72・21)

ii ○如意が峰から横手に向かふ老僧どもの大将には源三位入道、(122-23)

○再び鎌倉へ向かつても参るまじい。(231-4)

i と ii ごとの〈ニ〉と〈ヘ〉の用例数をまとめると次のようになる。

	《ヘイケ》	《エソポ》
i	ニ11 ヘ3	ニ13 ヘ0
ii	ニ7 ヘ19	ニ0 ヘ0

すなわち、ヘイケは〈ニ〉〈ヘ〉ともに i と ii にさまざまな用例があるが、エソポは〈ニ〉13例のすべてが i の例であるということである。i の場合には〈ニ〉と〈ヘ〉とは使用率でもあまり差が無いことは前節で述べたところである。しかし、i の場合でも、エソポでは「言う」「述べる」「返事をする」といった眼前の相手に対して発話する例ばかりであるのに対して、ヘイケの〈ニ〉はエソポと同じ用法も11例中3例（「物語する・仰せらるる・申す」）があるが、その他の8例は「～に向かつて」「合戦す

る・弓を引く」などの用例である。このような用法ごとの用例数の偏りが使用率の全体の差に反映しているわけである。

このような観点から、以下にはヘイケとエソポのいずれかで〈ニ〉〈へ〉の用例が多く、その用例数に差が見られる動詞を取り上げ、それぞれを比較する。

〈のぼる〉

- 六城殿の東の築垣に上って、…窺ひ見るところに、 (85-21)
- これから山伝ひに都に上って、 (310-2)
- まづ高野に上って、滝口入道が庵室を尋ねてござり、 (403-18)
- ある時また忠盛備前の国から都へ上られてござったに (10-2)
- 平家はその分にして京へ上られてあったに、 (173-13)
- さて小松の三位中將は高野へ上り、 (309-20)
- 今の都福原へ上らうずるに三日には過ぎまじい。 (146-3)
- 聖と共に高雄へ上らせられた。 (393-18)
- ◎蟻は大きに便を得て、その枝に上って、汀に上った。 (469・7)
- ◎日が既に暮るれば、鶏は梢に上り、 (476・22)
- ◎宮殿楼阁を飾りおいた高い台に上って言ふは、 (431・21)
- ◎シャント器に潮を汲んで、高座に上って言ふは、 (18・16)
- ◎京の鼠その恩を報ぜうずるとて、同道して都へ上った。 (448・3)

「のぼる」は、ヘイケでは〈ニ〉9例・〈へ〉32例、エソポでは〈ニ〉8例・〈へ〉1例であって、用例数ではエソポが〈ニ〉を多用している。〈ニ〉〈へ〉の承ける名詞に着目すると、ヘイケの場合、〈ニ〉は「山2・峰・高い所・丘・築垣・殿上・高野・都」（名詞の後の数字は2例ある場合の用例数。以下同じ）、〈へ〉は「都16・都の方2・京5・高野6・福原3・高雄」である。エソポの場合は、〈ニ〉は「枝・木2・上・梢2・高い台・高座」、〈へ〉は「都」が1例のみである。「築垣・峰・枝・木」などを i 《空間的に高い所》とするならば、「都・京・高野」などは ii 《遠く隔たった所》とすることができる。i と ii の〈ニ〉と〈へ〉の用例数は次のようになる。

《ヘイケ》		《エソポ》	
i	ニ 7 へ 0	ニ 8 へ 0	
ii	ニ 2 へ 32	ニ 0 へ 1	

すなわち、i の場合は両書ともに〈ニ〉の例しか見られないが、ii の場合に〈へ〉の用例数に大きな差が見られる。エソポは1例のみであるが、ヘイケの〈へ〉の32例はすべてii《遠く隔たった所》の用例なのである。
〈落つる〉

- やがて矢立ちながら、ながら南の小庭にどうと落ちたを、(142-13)
- 大鹿二つ一の谷の城の内へ落ちたれば、(270-9)
- 平家は…西国へ落ちようとせらるる時、(177-12)
- 薄墨という馬に乗って、播磨の明石へ落ちられ、(273-7)
- ◎冬が来れば、翼も地に落ち、(458-7)

ヘイケは〈ニ〉5例・〈へ〉9例、エソポは〈ニ〉のみ3例であって、その点で後に述べる「くだる」と同じ傾向にある。ヘイケに於いて〈ニ〉が承けるものは「南の小庭・前・地獄2」（他に「起請に落つる」）、〈へ〉は「城の内・三井寺・南都・西国4・明石・いづ方」である。注意すべきは、〈ニ〉の場合の「落つる」はi《落下》の意味であるが、〈へ〉の場合は「城の内」を除いて他はすべてii《戦いに破れて遠くへ逃げ落ちる》意であるということである。エソポの〈ニ〉は「耳・漁人の手・地」で、ヘイケの〈ニ〉と同じ意味である。結局、両書の差はiiの意味の例の有無から生じているのである。

〈帰る〉

- さて車に乗って宿所に帰って、(98-2)
- 晩景に及うで六波羅へ帰らるるが、(14-21)
- 手勢三百人引き分けて都へ帰って、(192-4)
- 輿に担かれて故郷へ帰った。(70-3)
- 頼朝は軍に勝って鎌倉へ帰られたこと。(149-5)
- ◎かの雑餉を持ってシャントの家に帰り、(421-8)
- ◎主君にてまします鶴、お宿に帰らせらるれば、(455-2)

ヘイケは〈ニ〉4例・〈へ〉20例、エソポは〈ニ〉のみ11例であり、ヘイケは〈へ〉を多用しエソポは〈ニ〉を多用している。ヘイケに於いて〈ニ〉が承けるものは「宿所・わが坊・滝口が庵室・旧里」、〈へ〉は「宿・わが館・大覚寺・小松殿・あやしの臥し所・平家・故郷3・太宰の府・都3・六波羅2・鎌倉3・福原・旧都」である。そして、〈へ〉の20例中14例までは「都・六波羅・鎌倉・故郷・太宰の府・福原・旧都」と

いった《遠く隔たった所》を承けるものである。エソポの方は〈ニ〉のみであるが、その承けるものも「お宿・わが宿・家5・シャントの家・わが館・家路・里」であって、エソポには《遠く隔たった所》の用例が無いのである。

〈くだる〉

○遥かに分け入って、峰に上り谷に下れども、尋ねも会はず、
(85-11)

○池殿関東へお下りあるが、
(320-7)

○都で事をし損うて伊豆の国へ下られたが、
(144-10)

○お使ひ屋島へ下ってこの返事を参らせたれば、
(290-10)

◎湊に下って、渡海の便船を得て、
(472-16)

ヘイケは〈ニ〉8例・〈へ〉29例、エソポは〈ニ〉1例のみであり、ヘイケの〈へ〉の多さが目立つ。承ける語から見ると、ヘイケの〈ニ〉は「谷・山の中・湯殿・奥・播磨の国明石とやら・関東・鎌倉2」であるが、〈へ〉は「先・宇治・東方・東・鎌倉2・関東10・福原・薩摩・伊豆の国・北国3・西国・備中の国・播磨・河内2・屋島2」である。〈ニ〉にも「関東・鎌倉」といった《遠く隔たった所》を承ける例があるけれども、〈へ〉の場合にはその用例が多数を占めている。エソポのニが承けるのは「湊」である。

〈渡る〉

○有王鬼界が島に渡って、俊寛に会ひ、
(83-7)

○いかにもしてかの島へ渡って、その行方を聞かうずる…
(67-2)

○播磨の高砂から船に乗って讃岐の屋島へ渡られたと聞こえてござる。
(256-9)

◎渡海の便船を得て、向ひの国に渡るところで、
(472-17)

◎その後エソポ諸国へ渡り、道を説き教ゆれば、
(432-7)

ヘイケは〈ニ〉1例・〈へ〉15例、エソポは〈ニ〉1例・〈へ〉3例である。どちらも〈へ〉の用例が多い点では両書共通している。ヘイケの場合、〈ニ〉が承けているものは「鬼界が島」1例であるが、〈へ〉は「屋島6・かの島3・くだんの島・豊前の国の柳浦・四国の地・伊予の国・伊予・鎮西」である。エソポの場合は、〈ニ〉は「向かいの国」、〈へ〉は「デルホスといふ島2・諸国」である。ヘイケもエソポも「渡る」は《遠く隔たった所》への移動を表す例ばかりであって、ヘイケにその用

例が多いということである。

〈赴く〉

○汝は遙かの旅に赴くに、見送らうとはせぬぞと仰せらるれば、
(320-10)

○行方も知らぬ旅路へ赴かるる人々の心の内は推し量られて、
(193-8)

○同じ二十三日の暁に奈良へ赴かせられた。
(124-11)

○都を立て、北国へ赴かれた。
(161-21)

◎エソポはエヂットに赴いた。
(436・9)

◎かの勅使と連れて、リヂヤの国へ赴いた。
(429・14)

ヘイケは〈二〉6例・〈へ〉11例、エソポは〈二〉2例・〈へ〉2例であって、ヘイケに於いて〈へ〉がやや多い。ヘイケの場合、〈二〉が承けるものは「つらい道・千里の東海・心憂い軍の場・遙かの旅・平大納言の配所・配所」、〈へ〉は「悪道・戦場・行方も知らぬ旅路・越路の旅・紀伊の路・丹波路・南海道・北国2・奈良・南都」である。承けるものは〈二〉〈へ〉ともに《遠く隔たった所》の例ばかりである。エソポに於いても〈二〉は「墓所・エヂット」、〈へ〉は「田舎・リヂヤの国」で、〈二〉も〈へ〉も同じように用いられている。「赴く」は本来《～に向かって移動する》という《方向》の意味を含むものであるゆえ、《遠く隔たった所》を承ける例が多いのであろう。いずれにせよ、ヘイケに〈へ〉が多いのは「赴く」の用例が多い結果に過ぎないと考えられる。

以上の他に、「行く」「参る」「出づる」「入る」は用例数が多いのであるが、それだけに用法も多岐にわたっていて、これまでの観点だけでは明確な偏りを指摘しがたいので本稿では省略する。

移動性動作を表す動詞の〈二〉と〈へ〉の用例を見てきたが、その結果、両書に〈二〉と〈へ〉に機能上の違いは認められないのであって、例えば、両書ともに〈へ〉は《遠く隔たった所》を示す場合に用いられているのである。ヘイケに〈へ〉の使用率が高いのは、平家物語の内容がそのような場所を話題にしていることが多いためと考えられるのである。結果として、エソポの〈二〉の使用率が高くなっているのである。

四

2類の動詞に於いては〈ニ〉と〈ヘ〉の使用率に大きな差異が認められないことは表Ⅰで見たところである。1類の動詞と同じ手続きで2類の動詞についてまとめたのが表Ⅲである。

〔表Ⅲ〕

	《ヘイケ》 《エソポ》				《ヘイケ》 《エソポ》			
	ニ	ヘ	ニ	ヘ	ニ	ヘ	ニ	ヘ
言い遣る	0・2		0・1		聞こゆる	13・1	0・1	
言う	9・0		19・1		ござる(3)	49・2	3・0	
異見する(1)	0・1		1・0		奏聞する(4)	1・0	1・0	
出す	0・2		0・1		伺候する(5)	1・1	2・0	
一味する	2・1		1・0		対する	10・1	1・1	
入るる(2)	24・14		3・2		奉る	2・6	0・2	
おいくだす	0・2		0・1		遣わす	1・11	0・2	
落とす	2・1		1・0		付く	23・0	6・1	
隠す	3・0		1・1		申す	19・6	1・1	
傾くる	0・1		0・1		遣る	0・9	2・1	

(注) (1) は「異見をなす」、(2) 「さし入るる」、(3) 「ござある・ござない」、(4) 「奏聞申す」、(5) 「伺候仕る」をそれぞれ含む。

非移動性動詞を承ける場合は〈ニ〉を用いるのが本来の用法であったが、ヘイケになると「申す・仰す・言う・訴ゆる・狼藉をなす・異見をなす・対する・告ぐる・一味する」にも〈ヘ〉が用いられる例が見られ、さらに次に掲げるように「ござる・伺候する」といった《場所》を表すものにまで及ぶことはすでに指摘されているところである。⁽⁹⁾

○また郎等がお庭へ伺候つかまつたことも武士の郎等の習ひなれば、(9-16)

○なぜにならでは、どこへござらうか？ (110-23)

「伺候する」はヘイケに2例見られるが、もう一つの例は〈ニ〉になっていることは注意しておかなければならない。エソポでは2例見られるがいずれも〈ニ〉である。

○義家は…、南殿の大床に祇候して、 (141-10)

○ケレソのお前に祇候いたせば、 (429・17)

「ござる」「ござある」を含む）はヘイケに於いては51例あり、〈ニ〉が49例に対して〈へ〉は2例に過ぎない。

2類についてはそれぞれの動詞の用例数が少ないために、〈ニ〉と〈へ〉の使用率の差の要因について明確にすることはできないが、以下にはエソポに〈へ〉が用いられた例を掲出する。

◎いかに、すぐれて気高い粧ひなるお方へ申さうずることがある。 (479・19)

◎狼はすなはち逃げて往ぬるが、たち帰って、野牛へ言ふは、 (482・1)

◎エソポ一紙を調べて帝王へ奉った。 (400・24)

◎獅子、狐のもとへ消息して言ひやるは、 (502・8)

◎両方に離れて、どちへも付かぬ牢人になった。 (483・22)

◎前足を井の側に投げ掛け、頭をも前へ傾けてござれ。 (490・21)

◎このことが外へ聞えぬやうにせい。 (420・12)

◎読誦の人へ対して書す。 (序・1)

◎ひとへに天道へ対してめされい。 (447・19)

◎農具をこしらへ与へて、田畠へ遣らるれば、 (410・1)

◎肥などを駄するために地下へ遣はいた。 (460・5)

◎為方なさにその辺な葡萄の葛の中へ身を隠いた。 (494・21)

◎ある棺の中へ入れておいて、 (496・11)

◎諸人座に列なつてゐる所へ獸の舌ばかりを調べて出いた。 (416・1)

◎主人は大きに腹を立てて、散々に打擲し、元の馬屋へ追ひ下され
た。 (451・14)

若干の補足を以下に加える。まず、「申す」については、ヘイケに〈へ〉を用いる場合もある。それらは、

○この由を関東へ申せば、 (406-22)

○出家の志しがあるといふ儀を便りに付けて、重盛へ申されたれば、 (61-4)

のように、距離のある相手に対する場合のようである。エソポの上掲の

「申す」の例も、獅子の皮を着た驢馬に行き合った狐がそれを知らない顔をして「すぐれて気高い粧ひなるお方」と驢馬に話しかけているところであって、間接的な物言いであるために〈ヘ〉を用いたのだと解される。「奉る」の例も「帝」への直接性を避けたものであろう。「言い遣る」の例も「手紙」によるものである。「付く」の場合は「どちへ」であり《方向》を意味する。「傾くる」の例も同様である。「聞こゆる」の例も「外へ」とあり《方向》を意味するものである。他の例の〈ヘ〉についてもそれぞれに説明を加えることができそうであるが、今は恣意的になることをおそれて省略する。

このように、2類に於いても、「ござる」や「伺候する」の例はあるにしても、全体として両書の〈ニ〉と〈ヘ〉に機能上の差は殆ど認められないと言ってよい。ヘイケの序文では「読誦の人に対して」とあるところが、エソポの序文では「読誦の人へ対して」となっているが、「対する」にしても、ヘイケには〈ヘ〉を用いる例もあり、逆にエソポに〈ニ〉を用いる例もある。

○重盛父清盛の法皇へ対し奉っての憤りの深いことを諫められ、

(41-21)

◎道理を育てぬ悪人に対しては、善人の道理と、その謙りも役に立たず、

(444・12)

両書の全体の用例からすれば、序文の〈ニ〉と〈ヘ〉との違いを全体に及ぼすことはできないのである。

五

キリシタン資料の時代には京都では〈ヘ〉が主流になっていた。しかし、ヘイケとエソポに関する限り、〈ニ〉と〈ヘ〉に機能上の大きな差異は認めがたいのであって、両書に於ける〈ニ〉と〈ヘ〉の使用率の差の主たる原因としては共通する用法に於ける用例数の偏りにあると考えられることを述べた。

このような用例数上の偏りは、両書の内容・素材の違いに由来するものである。平家物語は関東から九州を舞台とした合戦の描写が多く、おのずから動作・作用の行われた場所、特に都から《遠く隔たった場所》の記述がエソポに比べてはるかに多いのである。その結果としてヘイケ

には〈へ〉を用いる頻度が高く（相対的にエソポは〈ニ〉を用いる頻度が高く）なっているのである。

本稿は両書の〈ニ〉と〈へ〉との違いについて、共通する動詞のみから比較したものである。〈ニ〉と〈へ〉の文体差という問題を含めて、今後さらに詳細な考察が必要である。

注

- (1) 土井忠生『吉利支丹文献考』（三省堂 昭和38）
- (2) 『国語科学講座 8』（明治書院 昭和8）
- (3) 「近古末に於けるバ四・マ四の音便事情管見」（国語国文 昭和29・1）
- (4) 『日本語書記史原論』（笠間書院 平成10）
- (5) 『日本語の歴史』（笠間書院 平成13）

なお、同書で「（日葡辞書には）Fauaの項に『またはfafa』と記されているだけで、Fafa という項目はない。」とされているが、「Fafa.l.faua.ハハ、または、ハワ（母）母」（邦訳日葡辞書）とある。

- (6) 『天草版平家物語叢録』（笠間書院 平成15）
- (7) 「『天草版平家物語』の表現－助詞「に」「へ」の用法－」（神戸外大論叢 36巻 5号 昭和60・12）
- (8) 『天草版平家物語語意用例総索引』では序文が除かれているが、ここでは序文の例を追加している。ただし、和歌や漢詩の引用例は除いた。また、目録の例はエソポでも除外した。
- (9) 青木令子「『に』と『へ』の消長」（国語学 24 昭和31・3）

江口正弘「『天草版平家物語』の『に』と『へ』について」（『語意の解釈がゆれる 中古語と中世語の考察』（笠間書院 平成15）

（本学文学部教授）